菜沢縁一が自宅から三分の場所にあるコンビニエンスストアに出かけたのは夜食を買うためだったが、彼が徒歩でそこに向かったのは夜風が気持ちいいからだった。そして大前提として、彼が男だからだ。最近立ち込めた変な噂話が女性の独り歩きを抑える風潮があった。

夜というのは本来、昼に比べれば涼やかなものであるはずなのだ。しかし、八月に入ってから一週間経つ今日まで、一度たりともそんな夜は無かった。寝苦しく、じめじめしていて、重かった。口に出さないだけで誰もが寝苦しいと感じていた。とてもとても嫌な夜が、六日続いた。八月に入ってから迎えた七度目の夜は、やっと訪れたとてもとても良い夜だった。

少なくとも、菜沢はそう感じた。だから、徒歩で向かったのだ。

今はその帰路。口はチョコアイスを食み、手には三つのハーゲンダッツが入ったビニール袋が持たれている。父、母、妹のものだった。母に手渡された二千円札で買ったのが自身の食べるそれと、三つのハーゲンダッツだった。おつりは自由にしていいというのが慣例なので、彼は自分のアイスには家族とは違うものを選んだ。

「〜〜〜♪」

鼻歌をうたう。ザ・ヴィレッジ・ストンパーズ氏の『ワシントン広場の夜は更けて』を選ぶ彼の感性は文化への関心の深さと広さを感じさせた。しかし足取りはゆっくりとしたものだ。

家の前へと続く角が見えたところで、縁一は立ち止まり、首を傾げた。鼻歌に違う音楽が混ざってきたのだ。咥えていた棒を手に持ち変え、つぶやく。

「『月の光』……」

疑問が浮かんだ。彼は家の近くでピアノの音を聞いたことがなかったのだ。ピアノを置いているような——そんな家があっただろうか?文化に対する興味関心が強い彼は耳にするその音が動画や電子のそれではなく、たしかに本物の音色であることを感じていた。

少しの間、聞き入った。しかし、家で家族がアイスを待っていることを思い出し、足がまた動く。そのタイミングで、演奏が力強さを増し、儚さを深くした。再び足が止まる。彼は音源を確かめたくなった。迷ったのはそう長い間ではなかった。やがて、その場にハーゲンダッツが三つ入った袋だけが取り残された。その晩、それを発見したのは帰宅の遅さを心配した母親だった。

× × ×

縁一は十回以上角を曲がった。そうしてやっと音源を見つけた。そこはまるでお伽噺の中に出てくるような洋館だった。門は高く黒く立派だった。初めて見るのを疑問に思わなかったのは、完全に演奏の虜になっていたからだ。

「……綺麗だ」

やがて演奏が止まると、演奏の聞こえていた部屋の窓が開いた。少女が顔を覗かせた。